僕はやっているよ
～ 根拠をもった支援で理解に繋げる ～

報告者 ソイルセンター職員一同
作成者 上田 茉以子

1. はじめに

「うーっ！」大きな声を出しながらＡさんは顎に力強く手を押し当てる。長年の行動からか、顎にはタコが出来ている。そして、次に聞こえるのは「Ａさん！静かに仕事をします！」という職員の声である。「ふぁっ！うーっ!!」Ａさんは再び大きな声を出しながら顎に手を押し当てる。

これは生産活動の一つである、広告作業時によく見られていた光景である。

Ａさん

年齢　　:34 歳
支援区分　　:区分 4(強度行動障害対象者)
障がい名　　:自閉スペクトラム症
コミュニケーション　:発語あり
ADL　　:自立
その他　　:言語理解能力も高く、口頭の指示で作業などに取り組むことが出来る。
衝動性が強く、突発的に目の前にある新品の洗剤などを全て使う・捨てる行動や、他者の食べ物を盗食してしまうことがある。

Ａさんの広告折りのスピードは事業所No.1である。次々に広告を折っていき、量だけで見ると誰よりも作業に取り組まれている。職員も量をこなすために、スピードのあるＡさんを頼りにしていた。しかし、Ａさんの折る広告の角が揃っておらず 折り目も甘い。「角を合わせます」「丁寧に折ります」「やり直しです」「次はこの広告です」職員は当たり前のように口頭で修正・指示を行おうとしている。当然、A さんからすると“何を・どれくらい・どのように”すればよいのかが明確に分からない状況である。そして見られるのが「うーっ！」と大きな声を出して手を顎に押し当てる不安・不満を表出する行動である。

今回は、このようなＡさんへの支援を考察していこうと思う。

Ａさんは高等部卒業後、週 5 日のソイルセンターの利用を開始した。ここで簡単にソイルセンターの紹介をしたいと思う。社会福祉法人蓬莱会ソイルセンターは生活介護事業所である。1 日の平均利用人数 24 名、平均支援区分は 4.7。多くの方は自閉スペクトラム症であり、日々利用されている方の半数は強度行動障害対象者である。当事業所は生産活動に力を入れており、缶作業や委託作業(PC 分解やチラシの入れ込み)を提供している。様々な経験・活動を通して利用者さんの成長と、充実した余暇の為に工賃アップを目指している。

その中でもＡさんに対しては様々な支援に取り組んできた。1 つ挙げるのであれば食事支援である。Ａさんは以前かなりの早食いで、いつ窒息してもおかしくない状況であった。支援は弁当箱を手で持ち口につけて掻き込む行為を防ぐことから始めた。また、一口食べる毎に 1～10のカウントアップを行い咀嚼回

数を増やすことを試みたが、より多角的な視点を取り入れるために法人内に配置している ST にも協力を得た。ゆっくり噛んで飲み込むために口内・口唇の運動や、視角・触覚を用いたカウントの導入。人の動きに合わせるため、定期的に動作訓練の実施。現場では改めてカウントのタイミングの統一等を行った。様々な形で 5 年以上支援は引き継がれ、現在では職員の目は必要であるが介入も少なくゆっくり噛んで食事を行うことが出来ている。

2. 目指すところ

現状を職員間で話し合い、課題として挙がったのが

・作業中に大きな声を出すのが気になる
・開始時は落ち着いているが、時間経過で作業が雑になっていく
・広告の角が揃っておらず、折り目が甘い
・入れ込み作業の際に、広告を揃えようとするが雑になってしまう

ということであった。そのため、課題から浮かびあがった共通して目指すビジョンは“落ち着いた状態で、丁寧に作業に取り組む”ということになった。

3. ビジョン実現への取り組み

上記のビジョンを実現させるため、まず過去に実施した bon ワークスの評価キット(A1)の実施結果を振り返った。A さんの特徴として見られたのが、以下の通りである。

・周囲の動きが気になるため、個室や少人数での環境が望ましい
・右から行動を示すことが多い
・待つことが苦手
・タイマーを使用することは出来る
・明らかに見て理解できる手順であれば、指示がなくても行える
・言葉では刺激が強く、ストレスがかかる傾向にあるため、言葉かけは控える
・自信がない場合には職員の表情を窺うことが多い
・職員の表情をとても気にする様子が見られるため、立ち位置は背後に立つようにする
・急ぐ傾向が見られるため、焦らないで仕事が出来るように余裕を持った仕事量で作業時間の設定をする。

これらのことを根拠とし、支援の展開を図っていった。

① 環境設定

広告作業を開始した際は、集団の利を活かせる配置で行っていた。(写真 1・2)対面で作業を行うことで、職員が「仕事をしますよ」と声をかけずとも“何をするのか周囲の状況を見れば分かる”ことを意識した環境を整えたつもりだった。しかし、A さんの特徴を考慮すると、“見えるからこそ気になる”状態であった。よって、集団での活動から個別の空間での活動への変更を行った。

(写真1)集団での広告折り

(写真 2)集団での広告入れ込み

②ワークシステムの導入

これまでは大体の量は決めていたが、“何を・どのくらい”行うのかは不明瞭であった。これらの情報を伝えると共に、A さんの特徴の

・見てわかる手順であれば、指示がなくても取り組めること

・タイマーを使用することが出来ること

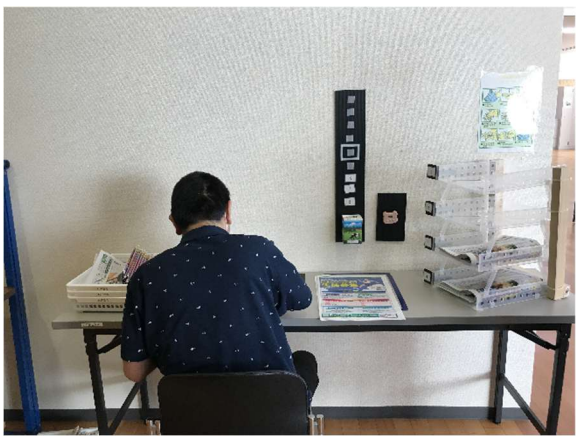
・焦らないで仕事が出来るように余裕を持った仕事量で作業時間の設定を行う

を考慮して、ワークシステムの導入を行った。

広告折り作業	
導入前	導入後
広告折りは連続で 300 部以上	前半→休憩(5 分)→後半で提示 前後半各 30～40 部×4 セットに変更
作業が終えるたびに、次の広告を渡す	ポケットマッチングを行い、どの広告に取り組むか明確にする
左から取る→折る→籠に入れる	右から取る→折る→籠に入れる
ある程度折る広告がなくなったら終わるが、いつ終わるかはわからない	ワークシステムで終了までの見通しが持てる状態 準備されている広告がなくなれば終了

(写真 3)折り作業ワークシステムの配置

(写真 4) 折り作業の様子



入れ込み作業	
導入前	導入後
他者と一緒に並んで広告を取っていく 向きはその都度変わる	一人で右から左に向かって広告を取っていく
自身の列が終了すると、別の列へ移動して他者の分も手伝う	入れ込み→休憩(5 分)→入れ込み 前後半各 130～150 部
全体の入れ込む広告がなくなれば終了	準備されている広告がなくなれば終了

(写真 5) 入れ込み作業ワークシステムの配置

(写真 6)入れ込み作業の様子

③ジグ(補助具)の導入

ビジョンの中に“丁寧に作業に取り組む”というものを掲げたが、A さんには

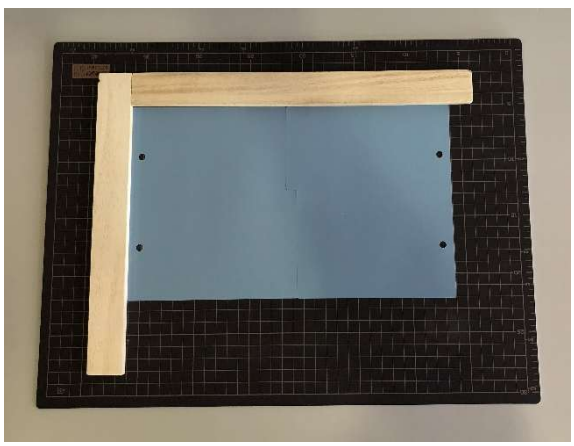
・自信がない場合には職員の表情を窺うことが多い

・明らかに見て理解できる手順であれば、指示がなくても行える

・言葉では刺激が強く、ストレスがかかる傾向にあるため、言葉かけは控える

という特徴が見られているため、ジグを導入した。導入時には A さんが適切に、そして自信を持って今後の作業に取り組めるようにジグの使用が出来るまでマンツーマンでモデリングや手添えを行った。職員の介入がなくても綺麗に折れるようになってからは一定の距離を取り見守り対応に変更する。これで職員の介入も少なくなるため、余計なストレスを受ける必要がなくなった。

(写真 7)折り込み用ジグ



(写真 8)入れ込み用ジグ

(写真 7)広告を折る際には左上の木枠の角に、広告の角を合わせて、下から上に折ることで綺麗に角を揃えることが出来ている。これまでの環境設定や、一枚一枚丁寧に折る状況を設定したことで今まで以上に折り目もしっかりとつけることが出来るようになった。

(写真 8)入れ込みの際には、まとめた広告を箱に入れて“トントン”と揃えることで一部ずつズレることはなく、まとめることが出来ている。また、しっかりと揃えるという工程を導入したことにより、急ぐように広告を入れ込む姿も見られなくなり落ち着いて作業に取り組むことが出来ている。

全体の流れが理解でき、問題なく取り組めるようになってからは、最後の特徴である

・職員の表情をとても気にする様子が見られるため、立ち位置は背後に立つようにする

を考慮して、視界に入らないような位置で把握を行うようにした。Aさんが自信を持って作業に取り組めるようになってから背後に移動したため、気にする様子もなく作業に取り組まれている姿が見られた。

5. 現在の状況

現在、A さんは毎週広告作業に取り組まれている。集団作業から個別作業へ環境を変えたことやワークシステム・ジグの導入を行ったことで“何を・どれくらい・どのように”行うかが明確となり、広告作業時に大きな声を出すことはほとんどない状況である。また、職員が共通して目指した“落ち着いた状態で、丁寧に作業に取り組む”ということは達成することが出来た。作業に慣れてきたのか自己流で取り組もうとされるのが玉に瑕だが、対応職員が早い段階で介入することでこだわりになることもないため、頻回な介入もなく大きなストレスは受けていないようである。

6. さいごに

「A さん！静かに仕事をします！」「角を合わせます」「丁寧に折ります」・・・今では職員のこのような声掛けも懐かしく感じる。最近の A さんはスケジュールを確認後、職員を見つけると小走りで近寄り「今日は広告やります！頑張ります！」と言って離れていく。一見するとただの確認行動なのかもしれない。しかし、今回実施した支援を始める前よりよく言われるようになってきた。

支援を始める前に聞かれていた A さんの「うーっ！」という大声には“僕はやっているよ！”という切実な思いが込められていたと感じている。ご利用者は様々な思いを抱えているが、それを上手く伝えられていないだけなのである。私たちが声にならない叫びをくみ取り、根拠を持って支援を提供していくことで、ご利用者は安心・安全を感じ、活動理解から自信へ繋がると信じている。

根拠のある支援は決して楽なものではない。楽ではないからこそ継続して取り組み、ご利用者の切実な思いに耳を傾け、根拠をもった支援を提供していくチームとして歩んでいきたい。